埋れつることとそうれたきい。つみ。なす清き心もあらはれすして

中山忠光　贈正四位　元治元年十一月十五日　二十二

おひ風に木津のかは口乘りぬけし舟は長門のうらにしつみぬ

高杉晋作　贈正四位　元治三年四月十四日　二十九

いくさ人君しまねけは春。風。に散るはなのことあたはやふれぬ

藤田　信　贈正四位　慶應元年二月四日　三十四

思ひ入りし筑波の山もさはり多みつひに越路の雪にうもれぬ

武市半平太　贈正四位　慶應元年壬五月十一日　三十七

土佐の海や墨繪の龍の雲をおこし空に翔りし時もありしを

月形洗藏　贈正四位　慶應元年十月廿三日　三十八

長門の海たちしあた波をさまりてつくしの空に月。かた。ふきぬ

加藤司書　贈正五位　慶應元年十月廿五日　三十八

眞心を君と親とにつくしゝやきみか日ころのこゝろなりけむ

高島秋帆　贈正四位　慶應二年正月十四日　六十九

商わさにいくさの術もきはめしやけにたか島の高きいさをし

川瀨太宰　贈從四位　慶應二年六月七日　四十八

まねかさる友もより來て尾花川人目のかるゝとき無かりけむ

孝明天皇　慶應二年十二月廿九日　三十六

のとかなる春やまちましゝ風さやく御階の櫻見そなはすにも

浦野望東　贈正五位　慶應二年十一月六日　六十二

ひめしまのつきを見るにも望。みけむくもゐはるけき東。のそら

坂本龍馬　贈正四位　慶應三年五月十五日　三十三

いかにせむ天路かけらふ龍の馬もつひにふしみの里に斃れぬ

中岡慎太郎　贈正四位　慶應三年十二月十五日　三十

世の中の亂れしなかをかにかくに整へむとてきみはつくしゝ

川路聖謨　贈從四位　明治元年三月十五日　七十二

浮雲のおほへる世にも月日としあきらかにこそ事はなしけれ

村山荷汀　贈正五位　明治元年六月十四日　四十一

はな荷汀のみつに散りにけりきよきかをりは世にのこれとも

三好監物　贈正五位　明治元年八月十五日　五十四

きみよしや命死ぬともいろかへぬ青葉の城そかたみなりける

日柳耕吉　贈從四位　明治元年八月廿五日　五十二

一度はとらへらるとも何かうきちからのかぎり國につくせは

土井利忠　贈從三位　明治元年十二月三日　五十八

商業も軍のすへもきはめけむこゝろするとしたゝならめやは

大村永敏　贈從二位　明治二年十一月五日　四十七

皇國のいくさの則をさためし はなかとしころの望みなりけむ

小松帶刀　贈從四位　明治三年六月廿七日

世の中もおほはむものを徒らにかれし小松そうれたかりける

雲井龍雄　明治三年十二月廿六日　二十七

昇るへき道をたかへてあたらしく雲井の龍もつちにおちけむ

廣澤直臣　贈正三位　明治四年正月八日　三十九

廣澤のいけのこゝろの深きをもくみてや君のめてたまひけむ

鍋島直正　贈從一位　明治四年正月十八日　五十八

國土をみなおほきみにさゝけゝむ直く正しききみかこゝろに

毛利敬親　贈正一位　明治四年三月廿八日　五十三

明けく治まる御代のにひ稲やうゑおほしけむ野田のおほかみ

田宮如雲　贈從四位　明治四年四月十九日　六十四

人心なこやの里ををさめてはたみやこゝろをきみに寄せけむ

玉松　操　贈從三位　明治五年二月十五日　六十三

玉松はたかきみさをのそれのみか棟とならむ性質もありけり

小原鐵心　贈正五位　明治五年四月十五日　五十六

雪のうちにさきいつるうめそ鐵の心のともとめてられにけむ

山内豐信　贈從一位　明治五年六月廿一日　四十六

國の爲つくしゝ君ようたうたひさかつき擧けて世を過しけむ

津崎矩子　贈從四位　明治六年八月廿三日　八十八

花のいろにやまとこゝろを深めつゝさきし老木の山さくら哉

澤　宣嘉　贈正三位　明治六年九月廿七日　三十九

こゝろさしのふよしも無したのみつる生野の軍事ならすして

江藤新平　贈正四位　明治七年四月十三日　四十

ますら雄のこゝろつくしの涙をも知る人なくて袖はくちけむ

靜寛院宮　明治九年九月二日　三十三

世のなかを靜かに寛にみそなはす暇もあらてなやみましけむ

安井　衡　贈從四位　明治九年九月廿三日　七十八

竹芝の寺にこもりて學ひしや世にぬけ出しもとにはありけむ

太田黑伴雄　贈正五位　明治九年十月廿五日　四十二

かみかせのむかしをしたふともを得て慨き心のへむとやせし

前原一誠　贈從四位　明治九年十二月三日　四十二

ふみてゆく道遠ひてはおもひ入りし一つ誠もかひ無かりけり

木戸孝允　贈從一位　明治十年五月廿六日　四十五

松の操菊のかほりをそなへたる人もありきといまもつたへつ

西郷隆盛　贈正三位　明治十年九月廿四日　五十一

きつま潟つきはくたけて荒波にのこりし玉や世を照しけむ

大久保利通　贈従一位　明治十一年五月十四日　四十五

いさをおほくほまれ高きも狂夫の刄はかりはのかれさりけり

林　鶴梁　贈正五位　明治十一年一月十六日　七十三

飢をすくひ銅掘りししわさをは世の人みなのほめはやしけり

芳野世育　贈従五位　明治十一年八月五日　七十七

踏わけし跡しらるへき御代にあひて芳野の花も匂ひそひけむ

大原重徳　贈正二位　明治十二年四月一日　七十九

大原のかせをはけしみ武藏野の尾花もつひにふしなひきけむ

戸田忠至　贈従二位　明治十六年三月三十日　七十五

忠こゝろ至れる君はみさゝきのあらむかきりをきはめ修めし

岩倉具視　大勲位贈正一位　明治十六年七月二十日　五十九

うこきなき國につくさむ眞心をかためましけむいはくらの里

岩崎彌太郎　従五位　明治十八年二月十日　五十二

つらゝゝに世の狀況をみつひしのひしりに恥ちぬ業は開きし

三井高福　贈正五位　明治十八年十二月二十日　七十八

たちかへりむかしなからの春はみつゐての山吹色をふかめて

三宅友信　贈従四位　明治十九年八月八日　八十一

外つ國の學の奥をきはむとものふるにかたき世にはありけむ

島津久光　大勲位　明治二十年十二月六日　七十一

しはゝゝの詔かくこしまつふさに君を傳へしふみを見るにも

中山忠能　大勲位　明治二十一年六月十二日　八十六

國の爲いさをしたかしたゝやすく世を過したる物ならめやは

山岡高歩　従三位　明治二十一年七月十九日　五十三

とくかはのなかれのすゑのうきしつみかゝりておもき鐵の舟

松平慶永　從一位　明治二十三年六月二日　六十二

德川のもとかれぬかにはかりつる故よしなかく傳ふへきかな

三條西季知　贈正二位　明治二十三年八月廿四日　八十

君のため西の海にはさすらひしゆくすゑともに契りかはして

三條實美　大勳位　明治二十四年二月十八日　五十三

きくらにもなほまさりけり君か代の春をかさりし梨の一もと

久邇宮朝彦親王　明治二十四年十月廿九日　六十七

末つひに五十鈴の川にすみにけりにこらて清き中川のみつ

毛利元德　大勳位　明治二十六年十二月廿五日　五十七

大きみに忠につかへし遠つ祖の後もとのりやさためおきけむ

淺田宗伯　贈從四位　明治二十七年三月十六日　八十一

大宮のおくより海の外までもきみかくすしのわさそあまねき

有栖川宮熾仁親王　大勳位　明治二十八年一月廿四日　六十一

にしひかしあたことむけし御功績は日本建のたけきにもすく

後藤象次郎　正二位　明治三十年八月四日　六十

國土を君にさゝくるはかりこと君によりてそさためられけむ

陸奥宗光　正二位　明治三十年八月廿四日　五十四

外つ國にむつひゆくへくおもふむねみつから君は行ひにけり

近衛忠熙　贈正一位　明治三十一年三月十八日　九十一

世の人の望をつなくいとさくら大和こゝろにほひぬるかな

四條隆謌　正二位　明治三十一年十一月十四日　七十二

皇軍の將とはなりぬ國のためこゝろつくしにさすらひし身も

勝　安芳　正二位　明治三十二年一月十九日　七十九

徳かはのなかれのすゑの海。の舟。いくはく人のいのちすくひし

伊藤圭介　從四位　明治三十四年一月廿一日　九十九

百年もあかつき起きをつゝけつゝ博きまなひや明らめにけむ

福澤諭吉　明治三十四年二月三日　六十八

横文字をたてにうつして縦横に學のすゝめあけつらひけむ

北白川宮能久親王　大勳位　明治二十八年十月廿八日　五十九

北白川みつはかれても高砂のしまのしつめとなをあふくかな

廣瀨武夫　贈正四位　明治三十七年三月廿七日　三十七

再たひもみなと塞くとほゝゑみて艦にのりけむますら武。夫。や

沖　禎介　贈從五位　明治三十七年四月廿一日　三十一

つゝみあへて碎けはてしもますらをの玉の光は世を照しけり

横川省三　贈從五位　明治三十七年四月廿一日　四十

皇軍の爲に流せるちゝはるにほゝゑみつゝもうたれつるはや

小泉八雲　贈從四位　明治三十七年九月廿六日　五十四

外つ國ゆしたひ參る來つ妻籠の出雲に住みて名には負ひけむ

副島種臣　正二位　明治三十八年一月三十一日　七十八

蒼。海。のふかき學を外つ國のまちはりの上にあらはしにけむ

壬生基修　從一位　明治三十九年三月五日　七十三

國の基。なかく定めてやすらけく嵯峨野の奥に世をすこしけむ

伊藤博文　大勳位　明治四十二年十月廿六日　六十九

幾千ひ。ろ。ふ。みにかくとも盡きせしな國につくしゝ君か功績は

奥村五百子　正七位　明治四十二年十二月六日　六十

國の爲に女子のまとゐ結ひけむ身をお。く。む。らを初めにはして

谷　干城　正二位　明治四十四年五月十三日　七十五

熊本の大城まもりしこゝろもてわか國ふりのよきやまもりし

東久世通禧　從一位　明治四十五年一月一日　八十

七草のうちの一くさめつらしと三つきの君やめてたまひけむ

高崎正風　正二位　明治四十五年二月廿八日　七十七

聖なるきみに知られてことの葉の正しき風を世にのこしけむ

明治天皇　明治四十五年七月三十日　六十一

明らけく治まりし代のすめらきは暗きをてらす神にましけり

乃木希典　贈正二位　大正元年九月十三日　六十四

皇國のまもりとなりしおみの木はかれても人の仰かぬはなし

徳川慶喜　從一位　大正二年十一月廿二日　七十七

國のためしのふか岡にしのひしはしのふにあまる心なりけり

昭憲皇太后　大正三年四月十一日　六十五

おほきさき時計の針の御をしへは暫時のほとも忘れさらまし

井上　馨　從二位　大正四年九月一日　八十一

國の爲馨しき名をのこしおきてうき世の外にすみしきみはや

大山　巌　大勳位　大正五年十二月十日　七十五

大山の千ひきのいはほ動かねは碎け散りけむよせしあたなみ

福島安正　從二位　大正八年二月十八日　六十八

シヘリヤの氷の上を行きしこまひつめのおとそ今も身にしむ

板垣退助　正二位　大正八年八月十六日　八十二

國にむくいたかき心をあらはして政こつへくきみはつとめし

大隈重信　從二位　大正十一年一月十日　八十五

播き初し早稻田のをしね榮行きておほくまなひの種も得にけむ

山縣有朋　大勳位　大正十一年二月一日　八十五

身にしみしこしのやまかせ吹きたえて椿の山の春やめてけむ

大正天皇　大正十五年十二月廿五日　四十八

ひこ皇子の四柱ますそたくひなき大き正しきすめらみことは

東郷平八郎　大勲位　昭和九年五月三十日　八十八

たけしとて名高き魯さの艦いくさ撃て沈めて名をそあけつる

贈從四位佐久良東雄長歌

遊櫻本長詩

天地遠隔之極千萬能國者雖有神祖神尊
天照日尊影開靈爾光良須春日尔無汇櫻本二無汇
義酒飲無汇味飯食而安曽汇居流　皇祖国者尊
久有氣理

神祇道學師平安曽義健東雄

長歌之部

小亭感詠

山水に心をやりて、老の身を養はましと、釜崎の岡のつかさに、さゝやけき庵を結ひ、天そる富士の高嶺を、築山となかめはるかし、底深き濱名の湖を、池水と湛へめくらし、且暮に持たむ心も、その山の高きにならひ、その湖の深きに學ひ、とことはに友としてまし、のとかなる春にしなれは、淺き瀨に貝拾ふあり、海老掬ふ夏の夜來れは、漁火は星とつらゝき、月清き秋の夜頃は、さゝら波黄金を寄せて、價無き景色なりけり、闇靂科戸の神の、御心のすさめるをりは、立つ波は山とくつれ、ふる雨は篠つき亂し、險しくて變るにやすき、世のさまをしめすに似たり、天地のなしのまに〳〵なり出し、この山水をわか庭と、誇らひ見つゝ老の身の心足らひに、百年も經む

贊烈士沖禎介歌 并反歌

皇國の益荒武夫は、命より名こそ惜しけれ、渡つ海の沖の武夫は、肥の國の平戸に生れ、幼ゆ人に優れて、内外の書よみうかへ、昔今の事を明らめ、身を護る術をも修め、志猛く雄々しく、大きなる功績立てむと、支那の國北京にい行き、學校を新に起し、ことさへくから國人に、皇國の道教へむと、つとめつゝありける程に、魯さの國睦みを背き禮無きを、討ち罰むへく御軍を出し給ひ軍兵を進め給ひぬ、その時に奮ひたちつゝ皇國の軍の爲に、輕かちぬ任を負ひもち、敵等のうしろに出て鐵道を毀ち棄つ可く、白銀と雪ふりつもり、岩床と氷れる中を、餓を凌き寒さに耐へて、五十日餘艱みやくさみ、齊々哈爾の邊に到り、企てし事をなす可く、謀りつる事を遂けむと、よろこひてありけるものを、悔しかも惜しかもよ、くなたふれ醜敵共に、端なくも搦め捕らえて、哈爾賓にかくみ送らえ、かにかくに問へと對へす、利を以て誘へと肯かす、速けく殺してあらな、おのれ縱殺さるゝとも、志同しき者の、許多も殘りてあれは、思ふ事爲さてやまめや、謀る事遂けさらめやと、言ひ放つ詞をきゝて、忽に驚き怖れ、まかね道を衛る兵、四萬を分け備しは、戰爭する力を弱め、思はさる幸とやいはむ、圖らさる功といはまし、今はとて刑の場に一木たてし、柱の本にいましめつ、目隱しなして銃執れる兵並ひ、打ちぬへくなしける時に、目隱しを取り棄てしめ、日本方に向ひ拜み、汝等か銃執るさまの、良否をなかめやらむと、微笑みつ殺さえにけり、年月をこゝに畢れは、明けく治まる年の、三十餘七つといへる、四月の十まり一日享け得つる君か齡は、三十餘一つなりけり、靖國の社に祀り、勳の章をたはり、位をも授けらえけり、あはれ〳〵命死ぬとも、かくはしき名は後の世にとこしへに輝きにけり、かくてこそ皇ら御國に生れ來し、益荒武夫のかひはありけれ

反歌

國の爲つくしゝ心はるひむに
屍さらしゝ君そ嚴しき

聞濱島翁(伊三郎)之自刄作歌 并反歌

八百日ゆく濱島の老翁、わかくして軍に徵さえ、國の爲君の御爲と、いそしくも仕へまつ

りて、勳の八等さへ、たまはりてわか家にかへり、大君の御あと慕ひて、逝きましゝ將軍の、乃木大人をしたひましつゝ、その大人を神にまつり、朝夕に仕へまつりて、その大人のあとにならひて、世の人を導き教へ、まめしくもありけるものを、いそしくもましけるものを、ゆくりなく病に罹り、癒ること難しときゝて、乃木大人の神さりましゝ、其の日しも事によせつゝ、家人を外に出しやり、白妙のきぬとりよそひ、あらこもを疊にしきて、しゝしもの膝折り伏せ、翦なすいはひもとほり、乃木大人の御靈をろかみ、おもむろに歌よみ記し、村正のきたひし刀、右の手に手握りもち、一文字に腹かきさはき、しか上を布にて卷き、更に又咽かき切りて、あくみ居し膝もくつさす、たちまちにこの世をさりぬ、いかに人病める身さへも、かくはかり雄々しくたけく、氷なす刄に伏して、いかしくも命死にたり、ますら雄とあり來し者よ、徒にうき世をかこち、身をうらみ人をのろひて、女々しくもふるまふへしや、この老翁の雄心まなひ、眞心を極めつくして、君の爲親の爲にと、人皆のはけみてあらは、死ぬも尙生けるか如し、濱島の老翁

反歌

惜らしく逝きし老翁はや
大君の御あと慕ひしあとをしたひて

漫陳心緒歌并反歌

挂卷も文に恐き、天照らす日の大御神、畏しや皇孫の命に、三種の神寶をし授けまし、詔ひけらく、葦原の瑞穗の國はわか皇孫の知らさむ國そ、いてまして知し食すへし、寶祚榮えまさむは、天壤のむた無窮に、極まれる事無からむと、祝き給ひ詔らし給へり、賜れるその御寶は、八尺瓊の御統はしも惠み深きなさけのさま八咫の大御鏡は、翳り無き智のしるし、十握の大御劔はいさましく武きあらはれ、言はまくもかしこけれとも、天皇の道の大源、國民の心の守、たくふへき物あらめやは、その內の大御鏡をこと更に、御手に執り持ち、吾か御子のこの御鏡を見むことは、吾を見るか如、同御床同御殿に齊ひまし仕へまつれと、先祖に仕ふる道を、まつふさに教へたまへり、國は家家は國なるわか國の道の基はこ

の時に、開かれにけり、動きなき國の體もこの時に定りにけり、橿原の畝火の宮に肇國を知しめしけむ天皇の神の命も時のまにま法を制るも國民の爲としならは天皇の大御しわさに違はしと詔らせ給ひ(詔曰夫大人立制義必隨時苟有利民何妨聖造)その後の天皇も、君と臣と名は別れても、親みは親子なせりと、詔り給ひ(雄略天皇遺詔義乃君臣情兼父子、今上陛下聖詔義乃君臣而情如父子)仰せ給へり、如此しまに御惠深き大君を戴き奉り、神代より仕へ來れる、御民われ等空しくあらめや、御惠に酬いむものと、朝夕に、いそしみ勵み、天照らす日の御光の、天地にい照りわたりて、萬の物成れるか如く、草木をも生すか如く、天皇の大御光の世界のかきり、輝き渡り、世界のかきり靡き寄り來て、仕ふへく盡さきらめや、つとめきらめや

反歌

天つ日の國の御旗は天皇の
世界の大君とならむ兆か

世界一君之歌 并反歌

此の世界には天つ月日も、國土も一つなりけり、然れはそそを知りませる、大君も一人なるへき、ことわりを餘處になしつゝ、幾人もありとこそきけ、世の中の進むにつれて、すめらみこと帝といへる、その人の減りもて行くも、その道に向はむはしか、末つひにいかなる君か、その位ふませ給ふと、つら〳〵に思ひわたせは、かしこさの類もあらす、御惠のはてもしられす、限りなき光を放ち、烈しかる熱さと共に、溫き力をもちて、人草はいふも更なり、木も草も、鳥もけものも、生きといける物生したて、いさゝかも、わたくし無くて、なさけ深き天照らす日に、ひとしかる御心もたす、君こそは世界の大君と、なりぬへき性質にはあらめ、つら〳〵に考へぬれは、天照らす日の大神の、御末なるわか大君そ、やかてその君なるへしと、おもへともそのあらはれむ、時はいつと思ひわたせは、幾年の後にやあらむ、大君となりなむ君の、天つ日と同しさまなる、御惠の世界の國々に、行きわたり外つ國人も、おのつから慕ひ寄り來て、誰も皆おなし心に、仰きまつる時にこそあれ、かくてこそ

わか日の本の、天皇とおはしましつゝ、天照らす日の大神の大御業受け繼きましゝ、天皇のかひはありなめ、おほけなきかゝる言たて、氣の狂ふものと笑はれ、痴者とあさけらるも、何か歎き何か厭はむ、許多の年をし經なは、おのつから證は得なむ、幾十度生ひかはりても、その時にあはてやまめや、そのさまを見すておかめや、子孫のそのつき〳〵の、後の世にこの言擧けを、語りつきてよ、

反歌

氣の狂ふものと世人はあさむとも
おもふ心をいはてやまめや

詠高砂松歌并反歌

帶媛神の命は、神祖のみことのまゝに、韓國をことむけ和し、御軍を旋し給ひて、播磨潟清き濱ひの、高砂の社の内に、韓國を闢き給ひし、御惠に報いますとか、須佐之男の神の命、稻田姫みめの命、兩柱いもせの神を、もち齋き鎭めましけり、奇しくもあやしきかもよ、御あらかの邊に近く、相生の松おひ出て、たちまちに茂り合ひつゝ、枝を垂れ緣深めり、須佐之男の夫婦の神の、くすはしき御心ならし、そこ思へはあやに恐こし、こゝ思へはいとも尊し、いもとせの本を開きし、那岐那美の神のみたまも、うつたへに幸ふものと、御殿を更に造りて、御祭を仕ふるなへに、世の人の聞きかしこみつ、遠近ゆ來寄り集ひ、大神の大廣前に、いもとせの契りを固め、おのかしゝ身にもつ業を、修理り固め成さむと誓ひ、かけまくもかしこかれとも、須佐之男のいもせの神の、御功績をしぬひ奉り、御幸ひを仰き奉れは、かちときの聲ときこえし、松風の音もかはりて、とことはに千代のしらへと、聞くそたのしき

反歌

高砂の雌雄の神松いもとせの
千代のさかえを見する神松

詠松歌并短歌

花はあり紅葉はあれと、四つの時色をしかへぬ、松こそはたふとかりけれ、松こそはめてたかりけれ、しみ立る貌を見れは、蟠る龍にも似たり、枝垂るゝ姿を見れは、舞姫のたち舞ふ如く、新玉の年の始は、家毎に門にも飾り、小瓶にも生けてそめつる長くも小津の崎なる、一つ松に袂を絞り、田子の浦に天つをとめの、羽衣をかけてそ偲ふ、高砂の浦の相生、いもとせの睦みを示し、住吉の岸の姫松、年を經て色をもかへす、吹く風に小琴を調へ月影に趣を添へ、木の上に鶴を巣くはせ、木の下に龜を住まはせ、君か代の千代をもたゝへ、變りなき御代をもほかひ、一株に庭のけしきを整へつ、しみゝに立ては、おのつから山もたふとし、又更におもほゆらくは、その幹は棟とも成り、柱とも桁ともなりて、大き小き家をも造りその烟は墨につくらえ、數々の史をもしるし後の世に代の態つたへ畫に書に心の色の濃き淡きかきあらはせり、かく數へ、如此擧け來れは、春秋の花にもみちに、ぬけ出てたふとかりけり、めてたかりけり

短歌

春秋の花にもみちに爭はぬ
松こそ安く千代は經ぬらめ

追想日本海大海戰有感作歌

北の國魯西亞の軍は、無比類猛く雄々しと、おほろかに聞しは非す、世の中にまことたけきは、直くして正しき道と、慈しき心なりけり、たくひ無き猛き軍と、誇らへる魯さの國と、端なくも戰ひし時、波羅的海の軍の、艦の隊うち聯りて襲ひ來むことを聞かして、かしこきや天皇ほ、東郷の將軍に、其をしも邀へ擊ちねと、大詔降し給ひ、軍艦許多率ゐて、海を掩ふ敵の軍を、筑紫の海沖の島回に、まち迎へ戰ひし時、皇國の興り廢りも、この軍一つにあれば、つとめてよ勵みてあれと、高々に言葉の信號、揭けつゝ競ひかゝりて放つ彈のあたなるは無く、忽に敵の大艦、わたつ海の底の藻屑と、擊ち沈め勝ちぬる時に、溺れたる軍人をは、悉に救ひ助けて、敵等の籠に飼ひおける、小禽さへ共に救ひぬ、東郷の將軍は、電の信をはせて、天の祐神の助けに、かくはかりいくさ捷ちぬと、大君に奏し奉れは、汝等の忠し

き爲に、皇吾か歴代の御祖の神靈にし對ふることを懼ふと詔らせ給へり、こゝを以て眞たけきは、直くして正しき道、慈しき心にありと、言ふことをたしかめ得たり。今やわか大日本てふ、大艦は世界の大洋に、國々の大艦小艇、つらゝけるそのたゝ中に、たゆたはす乘り出にけり。非常時にしあれは、よしゑやし風は荒くも、よしゑやし波は高くも、わか執れる正しき道と、慈しき心つくして、大艦は思ふ湊に、到り着き日の大御旗、中空に高くかゝけて、曩の時と同しさまたる、大詔再度賜り、乘組の國民共に、萬歳を高く唱へむ、時まつわれは。

建國祭記感歌并反歌

挂まくも文に恐き、天照す皇大御神、皇御孫の神の命の、此の國に天降りし時に、八尺瓊の五百箇御統、眞さやけき八咫の御鏡、鋭利き十握の劍、三種の大御寶を、大御手に執り持たしつゝ、葦原の瑞穗の國は、吾か御子の君たらむ國、御孫の命往き知し食せ、御位の隆えまさむは、天壤のむた無窮に、極みなく坐しなむものと、詔らしつゝ授け給へり、その神の御末とまして、中つ國征討け和し、橿原の畝火の宮に、宮柱太敷まして、八紘宇となしつゝ、肇國を知らし給ふと、高御座高知りましゝ、うまし日の良き日は今日そ、御民吾等御祭仕へ、諸共に祝き交しつゝ、更に又言擧すらく、其の玉のうるはしき如、蒼生撫て慈くしみ、その鏡翳り無き如、理を照らし明らめ其の劍鋭きか如大御稜威彌輝かし、天の下國の悉、親しまひ睦みし行かは、非常ぬ時は物かは。四方の海波風立たす、白波の五百重の外もおのつから靡き寄り來て、八尺瓊の御統の如、萬つ國一つに總て大君の知しめしなむ、かくしまに進みしゆかは、天つ日の一つの下は、其の君も一人ますへき天地の理さへも御鏡のくもり無き如、明かに、世に知られなむ、劍なす嚴し御稜威もます〳〵に輝きぬへし、かくてこそわか國建てし、皇神の大御意に、適ふと言はまし

反歌

橿原の宮しきましぬ天地と
共に榮えむ根さし堅めて

世界の限り平和めむものと皇御祖
大やはと國建て肇めけむ

兩陛下銀婚式御盛典之日詠歌

かけまくもかしこかれとも、八しま國民の悉、日の本の人の皆から、夜晝に御父と仰き、朝夕に御母と慕ふ、かしこきや天皇、かしこきや皇后の宮、いもとせの大御契りを、十あまり五とせ長く、めてたくも重ね給へは、九重の大宮内も、天放る鄙の里邊も、おしなへてことほき奉り、歡ひの聲そみちたる、あはれ〳〵今日の佳き日は、噴きあくる御池の水も、銀と見えこそわたれ、御園生に群れ居る鶴もしろかねに造るに似たり、その水の絶えぬか如くその鶴の千代經るか如彌さかえ榮えいまして續きて來む黄金のいはひしら玉のそのことほきも今日の如仕へまつらむ御民等の仰く御父そ御民等の慕ふ御母そ立並ひ幸くいまさね千代に八千代に

祝縣居神社遷宮祭詠歌并反歌

朝日の直さす岡、夕日の日照處に、御社を遷し奉り、あらかねの底つ岩根に柱をは太敷立て、久方の天つ御空に、甍をは葺高知り、拜殿新に造り、もみち葉のにほへる時の、八束穂の色付く秋の、よき時に良き日選ひて、今日の日を足日と定め、宮うつし仕へ奉れは、濱松の市をこそりて學子等集ひより來て、御功績をしたひ奉り、大前を拜みまつる、かくしまに同心に、諸人の仕ふるさまを、平けく見そなはしまし、安らけくきこしめしつゝ濱松の色かへぬ如、とことはに鎮りいまし、神みいつ幸ひまして、皇國の大御光を、見はるかす大海の外、千萬の外つ國かけて、かゝやかし照らし給はね、朝日の直さすか如夕日の日照らすか如

反歌

神みいつ彌かゝやかむ宮うつし
つかへ奉れる今日をはしめに

犒衆議院議員選擧關係諸士歌

いにしへの安の河原の、ことはかり今にうつして、政議りきためむ、傑士えらひ舉けむと、人皆の思へる時に、われこそと名乘を揚けて、國の爲つくさむすへを、おのかしゝ言葉にのはへ、とり〳〵に文にもつらね、爭へる人多けれは、赤根さす晝は終日、烏羽玉の夜はすからに、西に走り東に馳せて、右に左にすゝしきそへは、その下に事執る人も、箸をもつ暇もあらす、枕とるひまさへも無く、程々に勵みつくせり、かくしまに勵みつくすは、その黨の爲のみならめや、その黨の名こそ異なれ、國の爲つくす心は、誰も皆同しかりけり、然はあれと數定まれは、おのつから落るもあらむ、然はかりつくしゝ人の、落ちぬへき事そうたてき、いかて〳〵その勝敗の、明らけくわかれぬ間に、國の爲盡しゝ人等、一處に招き集へて、海山の殺を貯へ、八入折の美酒すゝめ、つかれをも犒ひぬへく、いたつきも慰めぬへく、心には思ひはすれと、わひ人の資力無けれは、すへを無み禿筆執りて、おふな〳〵かくし慰め、かくし犒らふ

謹奉賀　皇太子殿下之御成婚歌 并 反歌

天地のはしめの時に、伊邪那岐の神の命伊邪那美の神の命に、もろ〳〵の天つ神たち、水母なすこの漂蕩へる、國原を固め成せよと、大勅のらし給へり、恐くもみことのまにま、二柱神の命は、此の國に天降り給ひて、いもとせの道をは興し、國を造り神をも生まし、千萬の事等こと〳〵、まつふさに成し竟へませり、その御あと其儘にしも、今の世にうけつきまして、めてたくも契らせ給ふ、皇子の命御妃の命は、大御惠山より高く御いつくしみ海より深し、そこ思へはあやにたふとし、こゝもへはいともかしこし、國といふ國のことこと、人といふ人も皆から、み惠の高きを仰き、み慈しみ深きになつき、おのつから慕ひよりて來て、うつし世の平和は成らむ、しかれこそたゝよふ國の、彌固く成りしと言はめ、かゝれこそ世界の大君と神隨仰かれまさめ、二柱夫婦の神の、故事を偲ひ奉りて、恐くも今日の慶事は、皇國の幸は更なり、頓て世界の、平和のもとゝ言賀き奉る

反　歌

世界の限り今日の吉言やたてまつる

世界大君とならむ皇子故

謹奉頌靜岡縣　行幸歌

八隅知我か大君は、神隨歷世の皇祖の、天と掩ひ地と載せつゝ、食國を安みし給ひ、蒼生惠み給ひし御蹟にし倣ひましつゝ、御民等を、撫て慈しみ、教草さか行く狀も、つはらかに見そなはし坐し、產業の開け行くをもまつふさに、知し食さむと、靜岡の是の縣に、大行幸なし給へれは、富士の嶺は群山率ゐ、御車を迎へ奉り、荒灘の浪の響も、のとまりて千代をうたへり、山川も寄りて仕ふる、大君の嚴し御稜威は、天地にい行き足らひて、世の限り靡き寄り來む、時まつわれは

反歌

長人と聖世に有經てうれしくも

今日の行幸を拜み奉る

賀辻益彥翁之古稀併祝金婚式歌

八衢の辻の翁、吉事のみ益彥の大人、菅原の神の御裔と、神主の家に生れまし、神等によく仕へまし、敷島の道にも深く、糸竹の技をもきはめ、遠つ祖の神の由緣に、梅の花いともめてまし、梅守ると齋にも名つけ、霜雪にたはまぬみさを、氷なす清き心に香くはしき名をもたてつゝ、いにしへゆ稀てふ齡、眞幸くて重ねし上に、いもとせの契めてたく、もろ共にさかえ〳〵て、梅の實の黃金のほかひ、豐ほきほきもとほすも、神たちの御心ならし、八衢の辻の翁益彥の大人、

祝篠田(時化雄)翁之喜壽及金婚歌 并反歌

色かへぬ篠田の大人、吉事のみしけをの老翁、天照らす神のみかとに、いそしくも仕へ奉り、天つ日のい照す如く、人草はさらにもいはす、鳥獸草木をまても、殘りなく惠み給ひ、限り無く守り給へる、皇神の大き御稜威を、世の人に說き知らせまし、大麻を競ひ戴き、家毎にいつかぬは無く、人毎に仰かぬは無し、是そこの大人かいさをし、鴨川の清き涯に學校を築き建て給ひ、大空に聳高知り岩か根に柱太知り許多の博士を聘ひ、千萬のをしへ子

集め、神代より傳へ來にける、わか國の女の道を、まつふさに敎へ諭し、良き妻と賢き母を、許多もつくり出せり、是も亦大人のめくみそ、奥深き書の林に神と君の大道を究め奈良山に言の葉を摘み、和歌の浦に玉藻を撫ひ、斯の道を分け行く人等、ねもころに導きませり、これも亦大人のなさけそ、宜しこそ神もめくまひ、然れこそ幸多からめ、喜の齡を重ね、いもとせの契眞幸く、五十年をはやも經まして、子に孫に適妻むかへ、孫玄孫もいよいよまはり、彌榮え榮えいませり、大人こそは世の幸人、老翁こそは世の富人、色かへぬ篠田の大人、時化雄の老翁

反　歌

喜の齡と共によろこひの
數をつみしも神の御こゝろ

祝櫻井翁(勉)之米壽歌 井反歌

花くはし櫻井の大人、道の爲勉の翁、うれしくも悅はしくも、米といふ齡はつみぬ、米といふ詞の本は、世の中の根なりとそ聞く、稻といふ詞の本も、世の人の命の根ちふ、宜しこそ皇大神も、世の人の食ひて活くへき、物そとは詔らし給へれ、然はかり尊き稻、かくはかりたふとき米、わか大人の齡の數に、かそへむはいともふさはし、八束穗の如、萬千秋長五百秋に、いやさかえ榮えいまして、幾升の米の數々、あり數にかそふるはかり、まさきくて座せとそほかふ、道の爲勉の翁、櫻井の大人

反　歌

幾升の米の數々あり數に
さかえむ齡かきり知らすも

被招尙齒會記歡歌 井反歌

大御稜威高津の宮に、天下知しめしけむ、天皇の神の命、汝こそは國の遠人、汝こそは世の長人と、武内大臣の齡、めてたまひほめ給ひけり、しかあとにならひやしつる、もろこしの例やひける玉しきの平安の宮の、三つ栗の中つ御世より、老人を尙ふ會、めてたくも開け

そめつゝ、くれ竹の世々に絶せず、樛の木のいやつぎ〳〵に、傳へ來しあとのまに〳〵、今にそのつとひ開くと、老人の數に招ねかえ、重ねつる齡の上に、喜ひを更にかさねつうれしかもよろこはしかも、老ぬとてわひやは居らむ、と心にはわれもおもへと、舞はむには舞ふすへしらす、うたはむは老舌よゝむ、かきりなきこのよろこひを、何にのはへむ

反歌

喜ひの齡かさねしよろこひに
ます喜ひは今日のよろこひ

大正十四年七月七日七十七自壽之歌

八隅しゝわか大君の知し食す御代の年のは七に七を重ねし數の十餘四とせとそ云ふ七月の七日にあひて七十まり七の翁のわれなから喜ひ思はく神等の大御惠か健けく病もあらす事繁き職を退き家はとく子に嗣かしめつ子等は皆そのほと〳〵になよなよも獨立てれは思おく事こそなけれ思ふ事無き思ひ出にいにしへの偉れし人のすくれたるあと偲はむと寛なる政てふ年のほと世に出まして王に勤め國に報いし偉れ人三人につきて皇國の學の祖ともち齊く四人の大人七人のその筆の蹟壁の上にかゝけつらなへ明けく治まりし世のあたら世の始の時に國の爲君の御爲と西の國にさすらひましゝ七人のまへつきみたちおのも〳〵筆そめましゝ七枚の短冊あつめ七草の花手折り來て七寶の小瓶にさし七取の机に並へ七握の白髭かき撫て七つ緒の琴搔き彈き七杯の粕ゆ酒酌み天たらし國足らしつゝゑら〳〵にゑらき居るかも喜ひ居るかも

祝同心遠慮講創立滿五十年歌 并反歌

入紐の同心に、遠き後慮りて、結ひつる是のつとひは、諸共に善き事つとめ、とり〳〵に智を磨き、しか上に黄金を積みて、己か家の榮のみかは、人の爲國の爲にも、眞心の誠をつくし、幸あらむ事をそはかる、しか盡し然か圖りつゝ、五十年に今年はなりぬ、ほき言の言擧してむ、善き事をつとめむ樣は、麗しき玉にも似たり、智をしはけみ磨くは、さやかなる鏡にひとし、然かはかり善きをつとめ、如此はかり智をみかき、何事をなさむとするも、うつ

寶つみてあらすは、いかてかは行ひ得へき、速けく斷め行ふ鋭きは劍の如し、かしこしや
天つ日嗣の、みしるしの三つの寶を、そなへたるうましつとひそ、しかしつゝ力をあはせ、
かくしつゝ心を協へ、たゆみ無くつとめはけまは、とこしへに近き憂は、あらしとそおも
ふ

反歌

二つ無き三つの寶の御をしへを
一つ心にまもるつとひそ

聞笠井町笠井新田青年寒行絢繩事有感作歌 并反歌

いそしかもいさましかもよ、若人の儕等集ひて、白妙に雪ふりつもり、磐床と氷わたりて、
きゆる夜の曉かけて、身體を鍛ひ精神を錬ると、おもふとち語らひかはし、くたかけの聲
もきゝあへす、起き出てうち集ひつゝ、手なわさに繩なひ競ひ、朝日かけ昇るをまちて、お
のかしゝわか家に歸り、それ〳〵の業は勵みぬ、かくしつゝ十年は過きて、二年の數をか

さねぬ、この繩をよりあはせなは八島志奴美神の命の、打かけて國曳かしけむ、三つみの
綱にもまさり、家の富國の富をも、ひきよせむ力あるへし、いそしかもいさましかもよ、青
年の儕、

反歌

絢ふ繩の長き月日をよりあひて
身も心をも雪にねりけむ

祝靜岡縣立濱松第二中學校第二回卒業式歌 并反歌

學校の數は多けと、三つ栗の中つ學の、學校の此の學校は、かしこくも三つの寶の御形を
し、徽章と定め、それをしもしるへとなして、わもころに教へ諭せり、そのもとに年の五年、
螢をも雪をも集め、あけくれにいそしみ學ひ、今はしもその業卒へて、證書うけ得し今日
よ、いかはかりたゝはしからむ、いかはかりうれしかるらむ、然はあれと今より出て、世の
中に立つらむ吾子よ、行末の大日本國、つくるへき責はもおもし、手む抱きて空しくあら

めや、徒にあり經ぬへしや、八咫鏡くもり無き如、さやかなる智をつくし、御劒の鋭きか如、勇ましき力を奮ひ、八尺瓊の勾玉なせる、うつくしき心をもちて、世の人を啓き迪き、みすまるの五百箇つとひに、諸人をあともひ統へて、國の爲君の御爲に、つくしてそこの學校に、學ひつるかひはありける、徽章なる三つの寶の光こそかゝよふ可けれ、いき吾子よいそしくありなむ、つとめてありなむ、

反歌

二つ無き三つの寶の御をしへを
一つ心にまもれもろひと

祝誠心高等女學校卒業式歌

いにしへの天皇(文武)は、赤き清き直き誠の心もて、進みに進みたゆみなく、怠らすして勤めよと、のらしましけむ大詔、名に負ひもてる學校はこれの學校、學校の授くる業も更に又世にぬけ出て、をとめ等か知るへき事は、一つたに漏らすこと無く、纔たにのこす事無く、ねもころに敎ふるなへに、年の四年いそしみ學ひ、今はしもその業卒へて、證書うけ得し今日よ、いかはかりたゝはしからむ、いかはかり嬉しかるらむ、今よりは尙級高き學校に學ふもあらむ、家に在りて親を助けて世の務なすもありなむ、いや高き學はすとも、いや深き理知るも、わか國はふるき神代ゆ、動きなく定り來つるいもとせの道なわすれそ妻として賢き妻母として良き母となれ、赤き清き誠の心、わすれすて世につくしそ、いそしみて此の學校に學ひつる、かひはあるへき、つとめてありなむ

縣居文庫完成之時記感歌

縣居の神の命は、遠つ祖賀茂の御神の皇軍を導きましゝ御功績にならひやませる、千萬の書等よみ說き、皇國の正しき道を、まつふさに見し明らめて、ねもころに口にも稱へ、悉らかに書にもしるし、世の人をいさなひ給ひ、をしへ子を導きませり、宜しこそ學の神と、今の世に仰かれにけれ同し國に生れあひつゝ、御あとをし慕へる人等、賀茂川の同し流の、末くめる己等までも、もろ共に思ひはかりて、御社の御境内に、岩か根に柱太敷大虛空

に甍高知り、文庫をし新に建てゝ皇國の書は更なり、漢籍も外つ國書も、千萬に儲へ備へて、來て讀まむ人をそ迎ふ、來て讀まむ學の友よ、漢籍も外つ國書も、他し山の石となしつつ、皇國の正しき道を、白玉と磨き出ててよ、然れこそ國に盡しゝ、大神の大御心に適ふといはまし、

祝賀茂神社本殿修繕及拜殿改築竣成歌 并反歌

挂まくもあやにかしこき、橿原の日知り御代に、大御軍導き奉り、御先をし仕へ奉りし、山城の賀茂の大神、新宮をこゝに造りて此の里の產土神ととこしへに鎭りまして六百あまり六十年經たり、かくはかり長きほとには、幾度か新宮つくり、宮遷し仕へにけむを、近き頃又朽ちぬるに、折もをり時も時とて、產土の神の社を、三栗の中になしつゝ、千萬の事なしぬへく、はかりこつ君か御代とて、氏人も產子の儕も、相共に心を協はせ、御殿をつくろひ修め、拜殿改め造り、大神に仕へむものと、胥謀り相うつなひて、職工等にあとらへぬれは、てひと等は其の向々に、いそしみて仕へ奉り、大空に甍高知り、岩か根に柱太敷きうるはしく造りなしたり、今よりはこの新殿に、いもとせの結婚の儀式、めくし子の初宮詣、學校に昇らむ時、兵に徵されし首途、世の業にいそしまむ時、その業の成りしよろこひ、皇國の道の說きこと、大神に告けてそなさむ、大前に於てそなさむ、御產子の其の家々は、親族家族睦魂合ひて、彌榮に榮えうまはり、世の長人世の遠人と、眞幸くも御惠たはり、大神に仕へてあらむ、世の爲につくしてあらむ、大神の皇の御爲に皇軍を導き奉り、御先をし仕へし如く、世の人の魁なして、世の人の稱へむはかり、務めはけまな、

反歌

皇軍を導きましゝ大神の
御蹟にならへ產子もろ人

祝外孫初雄(山下)之新婚歌 并反歌

あなにやしえをとめを、あなにやしえをとこをと、互に稱へかはして、いもとせの契をはしめ、夫は唱へ婦は隨ふ、本をしも定め給ひ、漂蕩へる國固めよと、天つ神降し給へる大命

戴きもちて、大八洲國は更なり、八百萬神をも生まし、千萬の事肇めつる、那岐那美の神の命の例にし、倣ひ奉りいもとせの結ふ契そ、めてたくも嬉しかりける、今日よりは二人並居、あけくれにいそしみ勵み、朝宵につとめしまりて、たゝよへる國固めつる、神業の御蹟を學ひ、國の爲君の御爲に、いさをしく、世にあり經てそ、妹と背の契結へるかひは有るへき

反歌

萬代をかけしいもせの初契
まさしくあれと先祈るかな

同時贈象箸歌并短歌

うらくはしいと喜はし、箸こそはいもせに似たれ、片しにて事をやは成す、必も相並ひてそ食物をはさみもすへく、皆人の命もつなく、はしといふ言葉をとへは、上下をつなけるはしら此と彼とわたせるはし、まそ鏡向ひ居てこそ、おのも〳〵いさをは成せれ、簸の川に流れし箸はいもとせの契のもとそ、そこ思へはあやにくすはし、こゝもへはいともたふとし、然れはもよ箸とり出てて、いもとせの契を祝ひ、こと更に言擧せまし、喜はしあなて喜はし、うるはしく二人並ひ居、限りなき齡も經ませ、たゝはしき業もなしてよ榮え〳〵

反歌

歡はしあな喜はしいもとせの
象の壽のなかき契りは

詠昭和七年冬暖歌

此の冬は、如何なる冬そ、冬としもおもほへぬまて、暖けく空ものとみて、軒端には梅さきにほひ、垣内には若草もえ出、鶯もはや啼きぬへし、何しかもかく暖かき、かにかくに思ひ渡せは、北支那の醜の頑夫等、天皇の御惠わすれ、御民等を虐け殺し、鐵路を損ひ壞り、狂業のかきりつくせは、撃ちきため、服從はせむと、許多の將軍等、軍人率ゐあともひ、たゝ渡り

わたらひ行きぬ、白雪は八尺降り積み、厚氷岩床なして、指も墜ち血も氷るべき、寒さをも事ともなさて、ますら雄はきそひ進めり、そをしもや憫みまして、天つ神助け給へる、地つ神護り給へる、然れこそ暖ならめ、かゝれこそのとにはありけれ、冬としも無く

詠冬暖歌

冬の日の暖なると、老の身の健なるは、頼まれぬものゝ例と、いにしへゆ言ひ繼ひけり、世の言はさもあらはあれ、雪氷沍ゆらむ時に、一日たに暖なると、年々に老そはる身のしはしたに健なるは、そのほとの幸にそありける、よしゑやし一日なりともよしゑやし暫なりとも、うけぬへき幸はたふとし、いやましに暖くあれ、健けくあれ、

送新居町壯丁之入營歌

挂まくも綾に恐き、角避彦神の命の、敷きませる新居の里に、住ふなる益荒武雄は、大君の徴のまに〳〵、陸つ軍、海つ軍の、兵に仕へまつると、よろこほひ身もたな知らす、出立す狀そ雄々しき、御軍の隊に入りなは、御軍の掟を守り、空も翔り浪をも潜り、陸に海にはけま

ひつとめ、濱名の湖港の口を、つぬさきて、幸ひましゝ、大神の奇しき御蹟に、神習ひならひいそしみ、程々に功績たてゝ、おきつ波かへり來む日を、今よりそまつ

戰死病者招魂祭之時詠奠歌并短歌

諺に言繼けらく、香くはしき花は櫻にすくれたる人は武士、かくしまに稱へらるへく、すくれたるそのものゝふのたゝしにも引き出つへきは、この里ゆ徴されて出し、海陸の軍人等、海行かは、水漬屍、山行かは草生す屍、顧はせしと言立て、國の爲君の御爲と、盡しつゝ戰ふはしに、櫻花散り行くか如、いさましく戰死なしつ、然らぬも雄心抱き、悔しくも病に罹り、身うせつる軍人等、許多のみたまの爲に、ふさはしき時得つるかも、櫻花さきの盛に、神籬を齋場に設け、御祭を仕へまつれは、幼も老も集ひて、頸根衝き拜みまつる、許多の大御靈たち、天翔り地翔り來て、御祭をあなゝひ給ひ、皇國を守り給ひ、此の里をたすけ給ひて、櫻花開けにひらけ、みさかりに榮えゆくへく朝夕に幸ひまして、諺に違ひあらすな實にや實に、花は櫻に人はものゝふ

短歌

かくはしき花と散りぬる武士よ
御國の春を守りましてよ

羽田埜翁(榮木)五十年祭之時詠歌并短歌

常磐木の羽田埜の大人、色かへぬ榮木の翁、幽世に入りましゝより、百年の半は過きぬ、ねもころに御敎を受け、愛しき交を得て、親としもおもひ憑み兄としも仰き奉りし、人等の相議りつゝ、御祭を仕へまつれる、今日に逢ひて思ひ渡せば、大人はしも、幼き時ゆ千萬の書讀み醜り、後竟に平田の大人に、名簿をし捧けまつりて、斯の道の蘊奥を極め、神たちを敬ひ奉り、天皇を尊ひ奉り、かくれたる神を顯はし、廢れたる社を興し、拜むへき祠を頒ち、詣つへき道をしるへし、仕へますその御社の、御垣内に、文庫を建て、漢和幾千萬の書ともを集め藏めて、諸人の讀むに任せぬ、刈薦の亂れし世には國の爲皇の御爲につくしつる、益良武夫を、右に左に助けあなゝひ、矛執りて賢所の御守衛に仕へまつり、新しき御世と

なりては、皇學所によさゝれし、敎官を辭みまし、退きまつりて、故郷に歸り來まし、其の國の國府に建てつる學校の敎を總へぬ、それのみか民の產業興すへき、赤き心に赤引の糸の昔を引き出て、養蠶を勤め、傑れたる善き行の人々を傳へ彰し山川のその名所の、おほめけるあとを明らめ、埋れたる事をとり出て、まつふさに考へ定め、國の爲學の爲に朝夕に身もたな知らす、只管に盡しゝあとは、大人の名の榮木によりて、稱へまく述へまくそ思ふ限り無き多き功績は、榮木葉の繁きか如、後の世に傳はらむ名は榮木葉の色かへぬ如、亡き後の今も榮ゆる、常磐木の羽田埜の大人、榮木の翁

短歌

色かへぬ操によりて榮木葉の
多きいさをは立てたまひけむ

光海靈神追懷寄花懷舊之歌

御光の暉昌の大人、光海の靈神の命、現世にいましゝ時に、大神をかしこみ奉り、幾千度官

に請ひて麗しく修繕ひなしゝ、御社も今は荒れたり、仕へ奉る便をはかり左に右に御心つくし、造らしゝ清き家居も、他し人の今は住みたり、變り行く世の狀態は、歎かむもすへなかりけり、然かはかりあらむものかは、大御代の春の光を、大神の御稜威と共に、かきりなく輝かさむと、神垣にうゑにし花は、本毎にひこはえ生ひ、年毎に咲きかはりつゝ、荒れにける御社に似す、かはりつる家居に肖えす、彌さかえ榮えに榮え、今も尙春來る毎に、消え殘る雪にもまかひ、下り居る雲とも見えてうら〳〵とにほふか上に、遺しつる詞の花の光さへさしそはりけり、光海の靈神も、國てりのみたまといはまし、御光はいよゝますます輝昌の大人

教育勅語煥發四十周年有感作歌

往昔に比類もあらす、後の世の範ともすへく、神隨わか皇國を明けく治めましけむ天皇の神の命は、國の爲民の爲とて、みをしへの大勅ねもころに詔らし給ひて、國民に賜ひてしより四十年にはやくもなりぬ、そのかみを偲ひ奉れは、天と高く地とし厚き大御蹟見まつるが如、今更に仰かれにけり、降されしその御ふみはも、皇國の大御姿をまつふさに宣らしゝ御文、國民の行くへき道を萬代に教へし御文、これそ此の天地の道恐みて依らさらめやは、謹みて踏まさらめやは、挂まくも恐けれとも、その範はこの現世に、明けく遺し給へる、天皇の大御蹟にし、ならひ奉らな

大楠公六百年祭之時詠橘花遠薰歌 并反歌

經向の珠城の宮に、天の下知し食しけむ、天皇の命かしこみ、田道間守常世に渡り、採り來つる橘をしも氏として、吉野の宮に仕へまし、忠にいまして、大君も倚るへき陰と、たのもしく思し召しけむ、一本のあたら橘、荒れ狂ふ醜雨風の烈しさに爭ひかねて、湊川底の藻屑と悔しくも散りはてにけり、されと其の遺る薰りは、萬代の後に至りて、ます〳〵にそはりこそ行け、昔し人行きてまき來し、外つ國の常世のはてに、至るまてかをりみちけり、時の間もはた空の間も、かくしまに遠くかをれる、あと見れはかしこきろかも、たふときろかも

某議事堂扁額題共存共榮而詠歌

共に存り共に榮えむ、其の源を覓き溫むれは、國の爲君の御爲に、私の心を捨てゝ、公の道に遵ひ、論ひ政こつこそ、頓てその里の爲なれ、やかて其の家の爲なれ、諸共に睦魂合て、樂しけく在り經てこそは、昭けく和く御代に、生れ來しかひはありけれ、如此しまに心を定め、かくしまに身を行ひて、大君の詔のまにま、共に存り共に榮えよ、萬代までも

謹頌大楠公之精忠歌 并反歌

年經ては石となるてふ、楠を家の名に負ひ、花も實も香くはしといふ、橘を姓となしつゝ、大君に仕へ奉りて、己か身は云ふも更なり、兄弟もうからやからも、悉に、命捧けて、かへりみぬかゝる忠臣、世の中に又とあらめや。謀計用ゐられぬも露はかり恨もやらす塵ほとのたゆたひも無く、湊川軍の場に、速けく馳せ向ひつゝ、目に餘る敵にはあれと、物とせす馳け惱まし、刀折れ矢種もつきて、痛手さへ許多負たり、今ははや是迄なり、と思決め死ぬへき時に、七度も生れかはりて、敵等を亡してむ、と言ひにけむ弟君の、言の葉を聽きうへなひて、微笑みつ身うせ給へり。比類無き斯の忠臣を、守るへき神やまさぬ、と思ふまて憤しも、言はむすへせむすへ知らに、極りて悲しかりけり。然はあれと臣の鏡と、後の世に語り傳へて、楠の石となりつゝ、永久に殘るか如く、萬代に仰かれましぬ、香くはしく遺る其名は、橘の實さへ花さへ、その葉さへまし常磐にて、かをる如國内は更に、外つ國のはて迄も尙尊はれ慕はれましぬ。そこ思へは七世はむろか無窮に死なてありけり、かしこさの極みなりけり、尊さの限なりけり、あはれ！楠の公、橘の朝臣。

反歌

楠も橘も皆忠臣の
名を留むへき兆なりけむ

熱田神宮正遷宮祭之時有感詠歌

恐しや熱田の宮は、天照皇大神の、皇御孫に授け給へる、神寶三種の一つ、叢雲の大御劍の、神隨鎭り座せる、嚴し宮瑞の御殿、伊勢に座す皇大神の、恐こさに亞きて尊き、大宮におは

しませとも、年を經て損なはれつる、狀さへもあらはれつれは、新しく造り替ふへき、大詔降し給へは、御民等は歡ひ勇み、奥山の大峽小峽に生ひ立てる、大木小木をら、伐り採りて宮木と曳き來、草草と檜皮を集め、職人等は齋み清まはり、朝夕にいそしみ務め、美しく建て畢へつれは霜月の生日の足日、朝廷には御使またし、官人來寄り集ひて、宮遷し仕へ奉るそ、嬉しくもいとも嬉しく、めてたくもいともめてたく、ことほかむ極みなりけり、詣て奉り拜みてむと、思へとも病の床にある身とて、すへも無けれは、はろ〳〵に拜み奉り、おろかしく思ふ心を、かつ〳〵も言舉すなり、伊勢に座す皇大神に、亞きぬへき、大宮なから、かしこしや他し尊き御社と、同しき樣に官の幣たてまつるてふ、其の列の大き社と、稱へむはかしこかりけり、慨たくも歎はしかも、いかて〳〵かゝるめてたき、をりに逢ひて大きてふ字を、速けくとり除きつゝ、天照す皇大神に次きぬ可き、事を明らめ、世の人にその尊きを、知らさむそ事執る人の、大神を敬ひまつる、道としも言ふへかりける、かくてこそ天照します、大神の武き御靈と、まし〳〵て三つの寶の、一種といませる事も、明かになり

もて行かめ、官人諸人共に、つとめてありなむ

觀紅葉記感歌并短歌

挂まくも畏けれとも、大名貴神の命の大御けし、撰ひし時に、色々の御衣ふさはすと、脱き棄たしいやそのはてに、よそはしてあたねの汁に、しめ衣こしよろしと、詔らしけむ事を思へは、神代より赤き色をや、美しと愛て給ひけむ、秋去れはおく露霜に、山々の木々の紅葉は、錦ともみるへき樣に、麗しくそめ出しけり、そを觀むと晴れわたりたる、うまし日に思ふ友とち、杖曳きて山にものほり、又更に谷にも下り、淺きをは折りてもかさし、深きをはおきてもしぬひ、終日をなかめくらして、神の代も茜の汁に、染め衣そし宜しと、たゝへけむ事を思ひ出、その色をめてのあまりに、今の世にこひのむらくは、皇國の益良武夫よ、もみち葉の赤き心を國の爲君の御爲に、旦暮に極めつくして、わか國の錦を飾れ、よし散りぬとも

短歌

外つ國の赤き色にはなそみそ
赤きは同し赤きなれとも

自働車登金谷峻阪有感

香具士の神の力に、九十九折險しき阪も、小車にやすくそ登る、人も尙小車の如、心をし奮ひ起し、力をし極めつくさは、成し難き業は無からむ、なし難き事は無らむ、たはやすく阪路をのぼる、小車の如

昭和十年元日朗晴輕暖有感作歌并短歌

昭らかに和くなへに、千といふ年は立ちけり、その朝け旭の御影、うらゝかに豐榮昇り、吹風も條を鳴らさす、暖けく春かとそ思ふ、おのつから梅も咲き出て、鶯の聲さへ聞こゆ、時はこれ非常時、外つ國と盟ひし事も、かへつ可き時は來にけり、皇國の國の初ゆ、神隨繼き て執り來し、慈くしき大御惠み、明らけき大政、外つ國のあらむかきりに及ほさむ時は來向ふ、然れこそそのあらましを、今日のこの年の始の、初空にあらはしにけれ、かくてこそ

わか日の本の、御惠もあまねかるへく、御光もくまなかるらめ、うらゝけき朝日のめくみ、あたゝけき初空の如、昭けく和きゆかむ、外つ國までも

短歌

非常時は今なり常ならて
わか國民よいそしかりなむ

戲詠鶴龜歌

瘦せてたつ野末の鶴、ひちりこに尾を曳く龜、その鶴もおのかたくひそ、その龜も我か友ならし、しかはかり似てしもあらは、幸く經む千代萬代も、又更にわれを伴へ、はしきやし あはれその鶴、あはれその龜

病中偶詠并反歌

常ならぬ時にあたりて、常ならぬ病に罹り、蛭子なす足さへたゝす、もこよふにそれのみならす、更てたによゝむ老舌、彌ましにもつれ〳〵て、言問ひも定かならぬそ、憂はしき極

みなりける、今はたゝ直らむ事を、一向に醫師に頼み、神等の大御恵を、乞ひまつる外なかりけり、かくてこの悲しき中に、嬉しきは日毎〳〵の、新聞にかゝる病の活く藥、數を重ねて、あらはれし事にそありける、祈み奉る大神たちの、御恵によるにやあらし、神等の御幸ひならし、その藥しき用ゐつゝ、神等の御恵しるく、速やけく常に復りて常ならぬ時に盡さは、うれしからまし

反　歌

わか病癒えなむための活く藥
集ふや神のめくみなるらむ

詠選舉肅正歌并反歌

吾か國は神代の昔、八百萬千萬神の、天の原安の川原に、神集ひ集ひ給ひ、神議りはかりたまひし、時よりそことはかる國、公をたふとふ國そ近き世に大政、朝廷へに復りし時も、盟ひましゝ五つの中に毎事の大政、公の論以て、定めよと、のらし給へり、如此はかり正しき

國そ、かくはかり尊き國そ、然れとも近き頃には、外つ國の惡しき習慣、漸々に移り來つらむ、賄に選ひ情によそり、白銀に黄金にも替へ、饗にさへ廉くかありと、夙聞きつ慨み歎き、憂ひつゝありけるほとに、よき人をよく選ひつゝ、肅しまひ正しくせねと、掟給ひ定めたまへり宜な〳〵かくそあるへき、人々も同し心に、相率ゐ相いさなひ、歎ひて行ふへきを、いたつらに神の御前に、祈るてふ人もありてふ、如何なれはかくもかひ無き、正しきも正しからぬも、おのか身の心ひとつに、あるものを神に倚らめや、神たちによらむとならは、わか國は探湯詛、くさ〳〵の誓の方も、さはなれは神に盟ひて、おのれもし正しき道に背きなはうち罰めまし、たちまちに懲したまへと、眞心をさゝけ奉りて、一向に盟はむものそ、ますら男はかくそあるへき、かくてこそ淨く正しく、汚れ無き票は得可けれ、かくてこそこと議る國公をたふとふ國に生れ來しかひはありけれ、おほにな思ひそ、

反　歌

よき人をよく選ひつゝ

比類なくよき政しけよとそおもふ

詠海軍縮小會議歌

かしこきやわか大君は、かねてより世界の國々の、平けく和き行かむ事をしもこひのみ
ませり、その事はしるや知らずや、端なくも世界の國々の、その中に強き國そと、呼はれつ
る五つの國ゆ、選り出てし事議りひと、英吉利の都に集ひ、今の世の海つ軍を、縮むへくは
かりこちたり、その時にわか國よりは、他の國を攻めむ爲なる、軍をは皆からやめて、その
國を守るに止め、皆からにもしやめ得すは、成りぬへく低きにへらし、國民の力をやすめ、
國々も心、おきなく、睦み合ひ交らふへしと、論ひつとめしものを、容れられむ狀はあらね
は、今はとてその列離れ、われはわか事をなしてむ、その列はよし退くとも、睦み合ふ事は
忘れし、その執れる事はかはるも、今の世の軍の備、縮むへく願ふ心は、變はらしと思ふ誠
を、その場に言擧つくし、明かにわれは別れぬ、かくしまに別れし上は、吹く風のよしあれ
狂ひ、あた波のよし寄せ來とも、小搖きもあらぬはかりに、わか儕は力をあはせ、敷島のや
まとしまねを彌固めかためまつりて、大君の世界の國々の、平けく和きゆかむ、事をしも
望み給へる、御心に從ひまつり、ひたふるにつとめてありなむ、かくてこそ軍縮めむ、其の
事の本のこゝろに、かなふといはめ、會ふとこそいへ、

八十八自壽自嘲歌 并反歌

いつしかに年は積りて、八十餘八とはなりぬ、來し方を顧みすれは、何一つなしゝ事無く、
徒に老いさらほひて、力無き蛙に似たり、井の底に世をや過さむ、骨無き蚯蚓にひとし、土
の下に潜みやはてむと、思ひつゝ在りけるものを世の人は、米の齡とほきくるほし、祝き
もとほしぬ、その米はいかにと問へは、國の名の瑞穗とたゝへ、恐しや年の初穗は、新嘗に
御祭仕へ皇神に捧け奉り、天皇もきこしめしけり、更に又御酒に釀みては、言なくしるく
しとめてゝ、世の中の人の心を、彌さかに榮えしむてふ、その米を積みし齡の數の名にた
たへむ事は、たくひなく嬉しかりけり、なか〳〵にかしこかりけり、蛙なすかしこまり居
て蚯蚓なすうたひやせむと、思へとも尙たちかへり、左に右に思ひ渡せは、米といふその

名のもとは、小實なりといふのみならず、升を以て量るはかりの、わか身とて米の齡もふさはしと、言ふへかりけり、當れりと言ふへかりけり、宜へな〳〵八十餘八の米の壽

反歌

升を以てはからむ身にも米といふ
年を積みしはうれしかりけり

私賀新年宴會併記感歌

あら玉の年の始の、五日てふ生日の足日、かしこしやわか　天皇は、許多の內外の臣を、大宮に召上け給ひ、ことほきの御饗賜へり、されはもよ、大臣始め、朝廷へに仕へまつれる、臣等はいふも更なり、外つ國の國に代れる、臣等も皆集ひ來て、たのしけく內外睦ひて、大御饗いたゝきまつり、　天皇の無窮に坐す、御位をたゝへまつり、大御代をいはひまつりぬ、かくて又わかこひのむは、大君の深き御惠、彌高きみいつと共に、世界のかきりいゆきわたりて、天の下國のこと〳〵、おのつから集ひより來て、かくしまに仕へまつらむ、事にそ

ありける、

詠岳洋莊十二勝歌

山水に心をやりて、老の身を養はましと、濱名の湖西邊の岸の、片山の丘のつかさに、さゝやけき庵を結ひ、朝夕にめつる景色の數々を、かそへあくれは

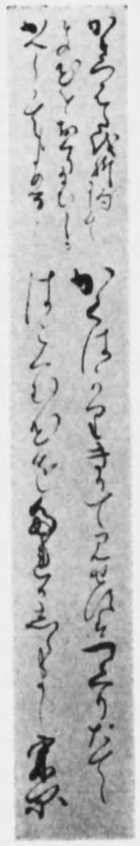
東瀛朝旭　東の海波間を分けて、朝日影さやに昇れは
富峯宿雪　ふしの嶺は雪にはえつゝ
鐵路晴嵐　まかねちはあらしにはれぬ
外洋怒濤　そとうみは五重重波たち
二宮積翠　二の宮の宮居の翠、滴たらむいろを深め
莊庭櫻花　ふしうみの莊の櫻、白雲とにほふを見るに
蘭田烟雨　雨烟る蘭つくる小田の綠をもしきてそしのふ
樂園夕照　夕日影たのしき園に、照り映ゆる頃としなれは

露光量違いの為重複撮影

釜浦歸帆　釜か崎歸れる舟の、眞帆片帆はやくれ行きて
長橋列燭　なかはしはともしつらゝき
内湖漁火　うちうみはいさり火つゝき
魚池金波　魚のいけは黄金なみ寄せ

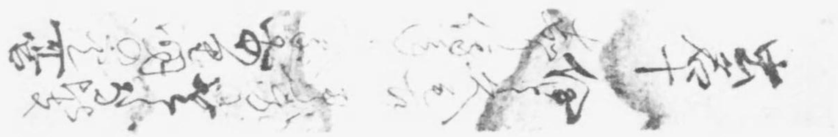
とり〳〵にけしきそへり、四つの時そのをり〳〵に、かはりゆくさまもめてつゝ、老の身のおいも忘れてたのしけく、餘れるいのち養ひてまし

赤尾可官筆



瀧原宗閑筆

野々口立圃筆



雜體之部

この部には各體を備ふべき關係上大正十二年前のものも數首雜れり

物の名　木火土金水

みつしほに爭そひかねてたつ千鳥すへもなきさに音をやなくらむ

山茶花

あささむくわひしき庭のいけかきにほへる花のめつらしきかな

つりきつね

月かけは千草のつゆにうつりきつねになくむしのこゑそさひしき

茶室

釜の湯に松かせをきく窓のうちやしつけきことのかきりなるらむ

うめもとき

赤き實を小禽むれ來てはむころは梅もときとや咲きいてぬらむ

抹茶

宇治の山つちやことなるかをりよき春の木の芽のいつるおもへは

生椎茸

子等よ子等いさ花見にとゆきなまし日たけぬ程にとくよそひせよ

國の名十

ひたなみのおきつしま山しろ妙にゆきつもりてはいよゝのとけし

鳥の名十

今をときとこますゝめつゝさきにほふ花の下かけとひ來つるかも

魚の名十

春たちてこちふくたひにあめふりてけさよりふかくかはへ水ます

虫の名十

かけろふのみたれあふてふこの夕たにのとかけにかへるくもかな

木の名十

かきりなきあまつひつきのみさかえはならふ物なしあやにくすはし

むもふとちを琴かきなしはしるしてつきまつよひはいともみちかし

草の名十

鶯のこつたひしつゝなきかはす聲をたちゐにきくよしもかな

果の名十

もゝの花なかくみむひはかきろひて逢ひしひときへうへゆくりなし

花の名十

あはきはらみけしもみそもなけうつは清く罪なきかきりなるらむ

獸の名十

うまれゐて人にしかさるうき身をはうしとねなきつ世をそたとらむ

調度の名十

ひとりのみこゝろもすみてあくるまを待つはことさらいとくらくして

十二支

執りとらぬうまく尋ねみ往ぬるあと起ち居うれひつしらさるはうし

折句

かつをふし

神たちをつねにかはらすをろかみてふかき惠みをしのひこそすれ

かきつはた

かせ吹けはきよくゆらきてつはめなす花の色香のたゝならぬかな

やまのいも

やま里のまつ吹く風ののとかにていまをさかりのもみちをそみる

ひなあそひ

日のひかりなこみゆきつゝ朝なゆふなそら高くなくひはりのとけし

沓冠

あめたかく、つちひきし

あふきつゝめてたき大道たとらむ日かみもうけひきくにもやすけし

廻文

みかゝみはとこしへに經しことしるしとこしへにへしことはみかゝみ

文字鎖

やまとふみ

やまとたままもらむためととりよろふふたつの御書見すてあらめや

ほとゝきす

ほたる觀ととひしもいとゝときなりききみすみいますすきの下いほ

數字假名

億百二萬萬

四四八四四七二八億九十百三九二二三四九十四萬萬四二三四萬六一十
七二九十百四二十六九三百十百十三六三八萬二二八二八七十百三千八
一十七三二一十十八五二百一十七三二億十八一十九十七四四九十七四

五八一

億百三四八三八九百一七百一十九十二五八一十十四六千四二八千四十

謎々

花

言の葉のことの散りぬる後もなほのこれる物は名にこそありけれ

鳩

はな散りてなのみになれるやとなれとひとの訪ひ來ぬひは無かりけり

旋頭歌

春窓

昨日今日軒端の梅の花さきしより寒けれととさしかねたり春の山窓

老鶯

若葉かけなほ鶯の聲そきこゆる山深み春の往にしを知らてあるらむ

夏衣

花染のかすみの衣をしみしや何そ白妙の卯のはな衣着こゝちのよき

避暑

海に山に暑さをさけむ時は來にけり夏しらぬ書の林をわれは擇はむ

海水浴

潮あみに年々來つる磯崎のやとなれ〳〵て家に歸れるこゝちさへせり

山家夏

友とする朝の松風庭の眞清水なか〳〵に深山そ夏はすみよかりける

菊

花の色のあらむかきりを菊に集めて嬉しくもひとつ籬の内に見るかな

炉開

契り置し都の友も冬も來にけりいさゝらは新室開き木の芽煮てまし

讀書

身を修め世に盡すへく書は讀みてよ徒に讀耽るともかひや無からむ

觀潮

音も無く滿ち來る潮そ雄々しかりける言擧せす業に顯はす丈夫の如

今様歌

春夜

春の雨夜のつれ〳〵に契らぬ友もつとひ來てやなきさくらの品定め

更るもしらぬ樂しさや

花下歌會

花の樹陰を訪ひ來れはこゝにも開く歌まとゐ思ひ〳〵の言の葉のいろをや花にならふらむ

旭光照波

貢の船のたちつゝく大海原の朝日かけさしもさかゆく君か代はなみさへ立たぬのとけきよ

人

神もむかしのすくれ人聖といふも同し人ひとたる道をふみわけて人のなかなるひとゝなれ

衣

袂ゆたかにたてといひし昔にかはる筒そてにうれしき事もうき事も今はた何につゝまゝし

石

堅き心はもちなから礎としも成り得すてあはれむなしく野に山にま
ろふ小石のうたてさよ

木

わか皇國の山々は木立茂らぬくまもなしいかし八桑枝榮えゆく御代
のすかたもあらはれて

鳥

鳩は軍のつかひしつからすは親をやしなへり君と親とに仕ふなる鳥
きへ世にはあるものを

魚

魚と水とのましはりを君と臣とに見る世とて御園のいけに住む魚も
物々てこそおとるなれ

夕初雪

友とつもれる歌かたりかたりつきせぬ夕まくれ心きゝたる初雪はか
へさしとてやふりいてぬ

國音歌四十八無同字

春邊種寄す早稻おくて夏うゑ弘め堰もまけぬ秋に實のらん愛彌千穂
冬かりをさむこれそ年
荒田かへさひ稻植ゑて其の穂も宜し米は得つ起居安けくをり緩むに
ふなみせんと吾まちぬ
われや寢る間もうらけせん臣揃ひゐて末ほきぬ天壤の共とこしへに
榮えゆく代を祝ふなり
稻植てをし井ほりのむ日頃ゆ喪なく今日寢らん幸ある吾は絶せすそ
まめにつかへよ君と親

詩歌兩讀體

海邊巖

雲羅有落苔波浪欲離開玉匣双觀浦双巖清氣來

歌訓

うら〳〵となみよりあくるたまくしけふたみかうらそいはほさやけき

偶成

天壤共無窮塗歌逼日東心情方寧矣聖世乃春風

歌訓

あめつちのむたとこしへとうたへひとこゝろもやすしみよのはるかせ

環體　是予之創體也私名環體從何句讀始亦成一首歌恰如環無端謹詠以奉頌

天壤無窮之　皇統云

君か代そ千代萬代にかきり無き天壤のむたとこしへに座す

筆文淵眞淺賀位三藤原

文章之部

五十聯の玉序

矢田忠敬大人世にいまそかりしほと、敷島の道に思を深めたまひて、近き世の歌人たちの歌を集めて、藤原公任卿の撰に倣はまくし給ひつるも、案の外に數多くなりて、その志を果し給はて竟に逝ましつれは、孝子忠興主、その志を繼きて撰ひ定めつへく、おのれにはかり給へり。見もてゆくに、いつれも今の世に名たゝる歌人、又は學者たちにして、いつれをか捨て孰れをか取るへきと、いと思ひ惑へる中に、おのかえせ歌も交らひ居れは、先これより省きぬ可しと云ふに、許し給はすきれは、こを撰はむは亡き大人より外にあるましけれは、今はそのまゝに序てむとするに、恰小倉色紙の半の數にてそありける、抑數の上よりいはゝ、百といひ三十六といふも、皆その據りところ定かならす。然るに五十の數に至りては、吾人の聲音の上にあらはれて、動かし難き自然の數とやいふ可から

む。かくて思へは、故人のあとをたとらて、一の機軸を出すへき、亡き大人の御心にやあらむといとおむかしくいとうれしくて、やかて五十聯の玉とは名つくるになむ。

蓮の香の序

蓮花てふ寺あり。主の上人を法城となむいへりき、上人は法の城を守れるのみならす、敷島の道の奥をもきはめて、その心の清らなるは、蓮の如く、その清き心よりにほひ出し言の葉の氣高きは、蓮の花のかをりにもたくへつへし。その詞のうるはしきは、葉に置く露の白玉にもまさりつへし。かくめてたきか徒に散りうせなむことをあたらしみ、心しりの誰彼、目もあやなる中より、かく千々の一つをぬき出てたるは、麗しき花の香の御寺の名と共に、とこしへなれかしとてなむ。

水谷成知八十賀集の序

昔尾張の濱主といへる翁ありけり。齡百十三にしていと健けく、承和の帝の御前に、和風長壽樂てふ舞を奏て、頗叡感に預りきと聞けり。こゝに岡崎市なる水谷成知翁、今茲

八十になり給へるも、彼の翁の如尚いと健かなり。かれ光風會の人々、及その門生たち、壽延を同市菅生神社に開けり、そのさま、社務所なる廣間の奥まりたる處に、金屏風をたて、褥を敷きて、翁の席とせり。傍にくさ〳〵のめてたき花を小瓶にさしてすゑたり。先つとひたる人々、右左の席に相對ひて就けり。翁は眞名子某ぬし相從ひて設の席に就く、次に記念の火桶を參らす。次に鳩の杖と頭挿の花とを持てる二人相並ひて、高らかに君か代の歌をうたひつゝ進みて翁の前に置く、次に饗膳はた籠にもりし果なと次に參らせ、次に祝詠の正式披講ありて、一度は高く一度は低く朗々とよみあくるさま、恐けれと新年御會始の御ありさまも思ひ出てられていとゆかし。かくて披講畢るや、翁はやをら席をたちて、右手に鳩の杖左手にかさしの花をとりて、あなうれし今日賜ひたる鳩の杖、つくともつきし老の齡は。と高らかにうたひつゝ退き給へり。彼の濱主の翁の、老ぬとてわひやは居らむとうたひけむ昔もかくや、と想はれて、おむかしきこと限り無し、今この集の首に一言記してよとあれは、その莚に列らさりし人の爲にそのあ

らましを記して、序にかへまくおもふも、雅やかにいと盛なりし狀況の、萬の一も抽き筆には盡し難きをいかにせむ。

鳰のうみの序

一日ゆくりなく、近江の國の舊友吉田克繼翁わか濱名湖畔の草の庵を訪ひ來て、いへらくおのれ今年は華壽となれるに、上もなくめてたき御卽位の御大禮行はせよるゝ、よき年のうまし年に逢ひぬれは、年頃蒐めおける近江の國の歌人等の、言の葉の花をすり卷とし、それに作者の小傳をもしるしそへ、鳰のうみと名けて新代の文化をことほき奉り、かしこけれとかしこきあたりにも捧け奉り、親しき友にも頒たむと思ふか如何にと、おのれ答へらく、神代より天津日嗣の大御位に卽かせ給ふを祝き奉るに、神代よりかはらぬ敷島の大和言の葉以てせむも、いとふさはしく、華の壽の思ひ出に、言葉の花をあつめしも心きゝたる業とやいふへからむ。かくてその國に咲き出し、文の華を世にかゝやかし、隱れたる歌人をも顯はしぬるは定めてその道の神もめて給ひ、同し學の人ともゝ

喜ひなむ、とくし給へとそゝのかすれは、又いへらく、そこは舊き友にして、久しく多賀神社に仕へまつりて、鳰の湖淺からぬ緣故あなれは、一筆はし書してよとあるにその器にあらねとも、いなみ難くて諾なひぬるも、なほ一言誂ふへき事こそあなれ。翁の集められたる短冊は、千枚に近くその內より略傳記のしられつるを、五百枚あまりぬき出たるよしなれと、既く世に行はれたる、彥陽歌集、續彥陽歌集などよりはあつめつる區域も廣く、作者の數も多けれは、翁のこの書は世にたくふへきものも無くめてたき極みなれと、あつめ得つる短冊にのみよられつるは、聊事足らぬ心地し侍れは、よしその短冊は得かてなるも、これにもれたる歌人のかきり集め給ひて、續篇となし給はは實に完き璧とやいふへからむ。から人の所謂隴を得て蜀を望むとやらむ、錦の上に更に花をもそへまゝ欲しく、かく言擧すなるを舊き友のよしみにいやなきを咎め給はて、續篇をもものしたまはむには、彌益々に神もめてたまひ人もよろこひ侍るへくなむ。

かしこき御大禮行はせらるゝ、昭和三年の十一月はかり。

栗田土滿傳の序

大人の名に負ひけむ土は、常のひちにあらす。つもりては岡となり、又山ともなるへき土なり。岡となりては、學の舍を建て學の徒をやしなひて、岡の屋といひけらし。山となりては、柱ともなり梁ともなるへき巨樹をおほし、或は大和心の花をもにほはせ、皇國の學の大道たとらむ人の分け登るへき、高嶺と仰かれぬ、あな尊きひちなるかな。あなくすしき土なるかな。師の翁の名つけ給ひけむも、宜へなりけり。あはれこの書や、その高き山にのほり、大和心の花をもたをりぬ可き枝折とやいふへからむ、散りほへる言の葉の一葉たに殘さしとかき集めたる、尾澤ぬしの勞も亦稱へさらめやは。

昭和七年四月はかり

杉浦國頭大人慰靈祭集の序

いにしへの曳馬の里中島なる六本松てふ地は、むかし天龍川のこのあたり流れたる頃の中島なりけむ、諏訪の大神の信濃より流れ來て此處に止り給ひ、そこに祀りしを後に濱松に移し奉りつるなりとそ。かくゆかりある地なれは、同社の大祝杉浦家の代々の奥城處とは定めけらし。されはわか濱松の里に、皇大御國の大道をしるへし、歌のあらす田墾り拓きし、國頭の大人もこの六本の松か根に、永久に眠り給へり。既くも二百年に近き春秋を歴て世の態も移り變り、後嗣の人も他し處に移り住みぬるより、奥城處の草苅拂ふ人も無く、徒に荆蕀の茂るに任せたりけるを、今度有志の人々あかぬ事に思ひて、胥ひ謀り相ひ談らひて、清くさやけくその地をはらひ淨め、今年の四月はかりに今日の足日を擇ひて、その十六日といふに御祭うるはしく仕へ奉り、香くはしき言葉の花をもあつめて、獻らまく四方の大人たちに請ひ申しゝに、言の葉の花の數々目もあやに獻らせ給へるそうれしき。されは大人のみたまも、天翔り地翔りて見愛て聞賞て給ひなむ、あはれ大人の御靈よ彌益々にさきはひ給ひ守り給ひて、斯の道の行末天のなか川の流たえせす、常磐の松の彌しみゝにさかえゆかむ事をこひのみ奉るになむ。

昭和六年七月はかり後學岡部讓八十三の老の梨言をしるす

古く萬葉集に見えたる、わか遠江の防人の歌には、君と親とを思へるもの多く見えたり。これ等そわか遠江人の最古き歌にて、又わか國人の固り有てる思想なりける。されは後に至りて、杉浦國頭大人の盡敬會を起して、日本書紀を研究したる傍、歌詠むことを勸めたるをはしめとして、わか縣居翁及その門下の人々はた門下ならぬも、その流れをくめる人々のいつれも同し志に、皇を尊ひ道を修むる傍よみ出し歌ともそ多かりける。こゝに尾澤ぬし、それ等の内より、小倉色紙の例に倣ひて、百首をなむ選ひ出されぬ。あはれ月花のかけには恐こき三つの神寶の光のこもれるを思ひ、古の防人にも劣らぬ人人の歌なるを知りて閲たまひなは、この百首の歌主たちもこの編者と共によろこひなむものそ。かく言ふは、八十六の耄叟賀茂縣主讓なり。時は昭和九年の五月はかり。

縣居翁のりよ女を哀しむ文に添へたる詞

わか縣居翁のりよ女を哀しむ文は、擁書漫筆に載せられたるか、いとめつらかなりと思ひ居りしに、今圖らすも小竹園大人のもてるその原稿なるへきものを鑑もてゆくに、水莖のあとゝ共に涙の痕さへ、いまた乾かぬ心地して、ほと〳〵袂のぬるゝも覺えすなむ。

かき流す涙の淵の玉藻にも、ふかき光はあらはれにけり

車の卷の跋

車の歌とも許多つくりけるをり、松平靜大人に送りて、そか是正を請ひつるに、大人の麗はしき筆もて、そを書き清められ卷とさへなしてその首に、

靈ちはふ言の葉車ひきつらね、大つちはしりおほそらかける、おとのかしこさわさのくすしさ、と書き又その終に、

日の本の歌はしまりてよりこのかた、かくはかりひきつらねたる車の數はありや、ためしなき數をつらねて後のおやくるまともによりつるかないかに〳〵よくさためよ、としるしつけて、その跋かきてよとあるに、

わか國に車てふものゝ出て來しは、いつのほとにかありけむ、はやく磐余の雅櫻の宮(履

仲)の御代に、車持君、車持部あれは、それより前なる事はうつ無し。さて近き世に至りては、車の數々いとさはになりもてゆくに心ひかれて、やせさらほひし老の身のかひ無き力に、しひてひき出し試みつれと、轅の折れ、軸(まさふみ)のそこなはれ、幅のたらぬなともあるへく、いかて善き車工につくろひ直しぬへく乞はゝや、と思ひなりておそる〳〵その道のすくれ人の御許におくりまつりしに、かへさまにたゝへられつるのみならす、うつくしき筆の林の中にひき入れられぬ。あはれ〳〵見るかけも無きやれ車、筆の林の花におほはる」。かくてはそこなはれ、又足らぬ處々を心つかぬ人もやあらむ、あなやさし、あなかしこしや。

昭和四年十二月はかり

曳馬萩筆の記

文明堂主人來りて萩筆の記を需めらる、そはおのれ常に愛て用うる所なれはいなむへきにあらす、聊思ふむねを記さむ。抑この引馬野の萩は萬葉集よりそ世にはあらはれける。萬葉集なる長忌寸奥麿の歌は、時の太上天皇(持統)參河國に御幸ありし時の事なれは、引馬野は參河國に在りといひ、又はきに榛の字を書きたれは、草のはきにあらす、はりの木なり、との說はやく契冲阿奢梨をはしめ、村田春海、荒木田久老、橘千蔭、本居宣長、の諸大人近くは鹿持雅澄翁なとも、其をうへなはれたれと、おのれは尙わか眞淵翁の說に從ふものにて、そのよしは翁の萬葉別記にくはしく論はれたれは、今更何をかいはむ、八雲御抄なとにも、引馬野の條に萬葉を引きて、はきと假字書にし給へり。地を引馬といへるは、海水の乾て隈となれるよしにて、その干潟に松の生ひしよりはやく濱松の名も出て來にけむ、延長の頃には、既に鄕名ときへなれり、さて引馬の名は平安時代以後のものには、彼是多く見えたるか中に、いさよひの日記に、引馬の宿といふ處にとまる、この處大かたの名は濱松とそいひし、とあるそよくそのさまを盡せるものといふへき。後に引馬を改めて、專濱松といへるは、元龜元年よりこの方なり。さて萬葉集なる引馬野の歌は御隨從の人の、をりしも十月の初なりけれは、咲き殘れる萩の花見むとて御暇賜り

て、こと更に引馬野にいたれるなるへし、そは次の高橋連黒人の歌に、阿禮の崎をよめるかあり、この阿禮の崎は濱名湖の西岸の名所にして、こも三河國より引馬に到るへき道のほとなれは、上の長の忌寸と共に行けるなるへし、とおもはるゝなり。秋萩のゆかり深き、その曳馬野も今は三方原と稱へ、大かた拓かれて家居に畑になりつれて、殘り殘されし處には尙むかしの名殘をとゝめて、萩いと多かるを、文明堂主人苅り採り來て牡鹿の夏毛もて筆に結ひたるは、いと心深きわさにて世の風雅男たちのめてくつかへるも、故無きにあらさりけり。あはれこの筆によりて、色深き言葉の花のにほひ出てなは、ひとり堂主人のよろこひのみならす、學の園のこよなき幸ならむかし。

さを鹿の夏毛をゆひて花妻の、ゆかり色こき萩筆そこれ。

宮人の手に取る筆となりにけり。きぬにほはしゝ萩の下枝は、

昭和十一年六月十五日印刷
昭和十一年六月二十日登行
（非賣品）
著作權者　岡部讓、
靜岡縣濱名郡舞阪町中ノ郷二千六百十番地ノ一
發行者　高田壬午郎
靜岡縣濱松市元城町百七十三番地
印刷者　同上
靜岡縣濱松市元城町百七十三番地
印刷所　株式會社開明堂

終